

詩 珍
文 派

へなづち集

新 聲
社 版

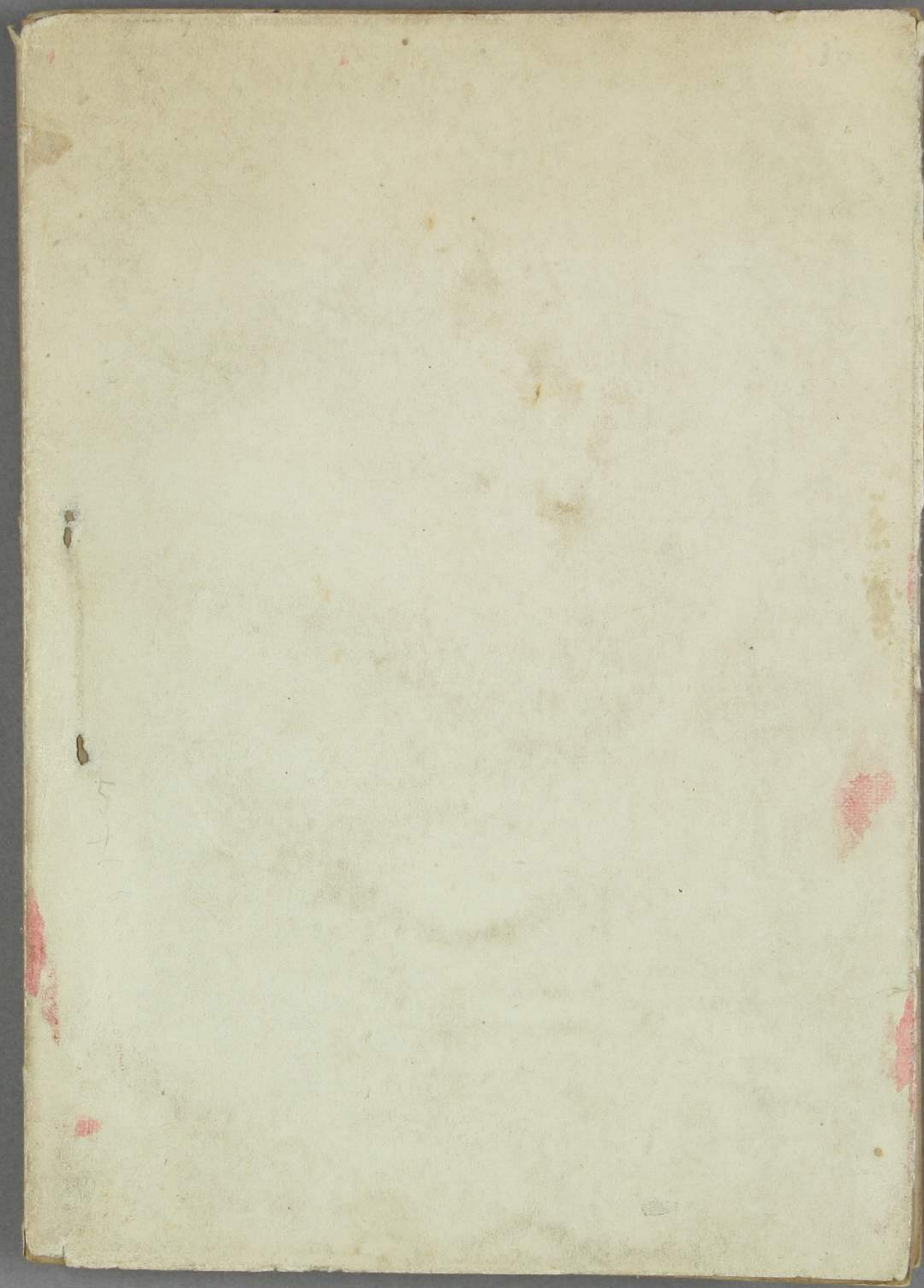
阪井久

良伎著

贅か罵か、諷刺か嘲笑か、
へなづち集の名何ぞ奇
なる。新派和歌の旺盛正
に其極に達せり、乞ふ更
に珍派文學を味はん歟。

70
65
60
55





詩 珍
文 派

へなづち集

新 聲
社 藏
版

阪 井 久
良 伎 著

賛か罵か、諷刺か嘲笑か、
へなづち集の名何ぞ奇
なる。新派和歌の旺盛正
に其極に達せり、乞ふ更
に珍派文學を味はん歟。

坂井之良俊著

家ぶと集

新書社刊

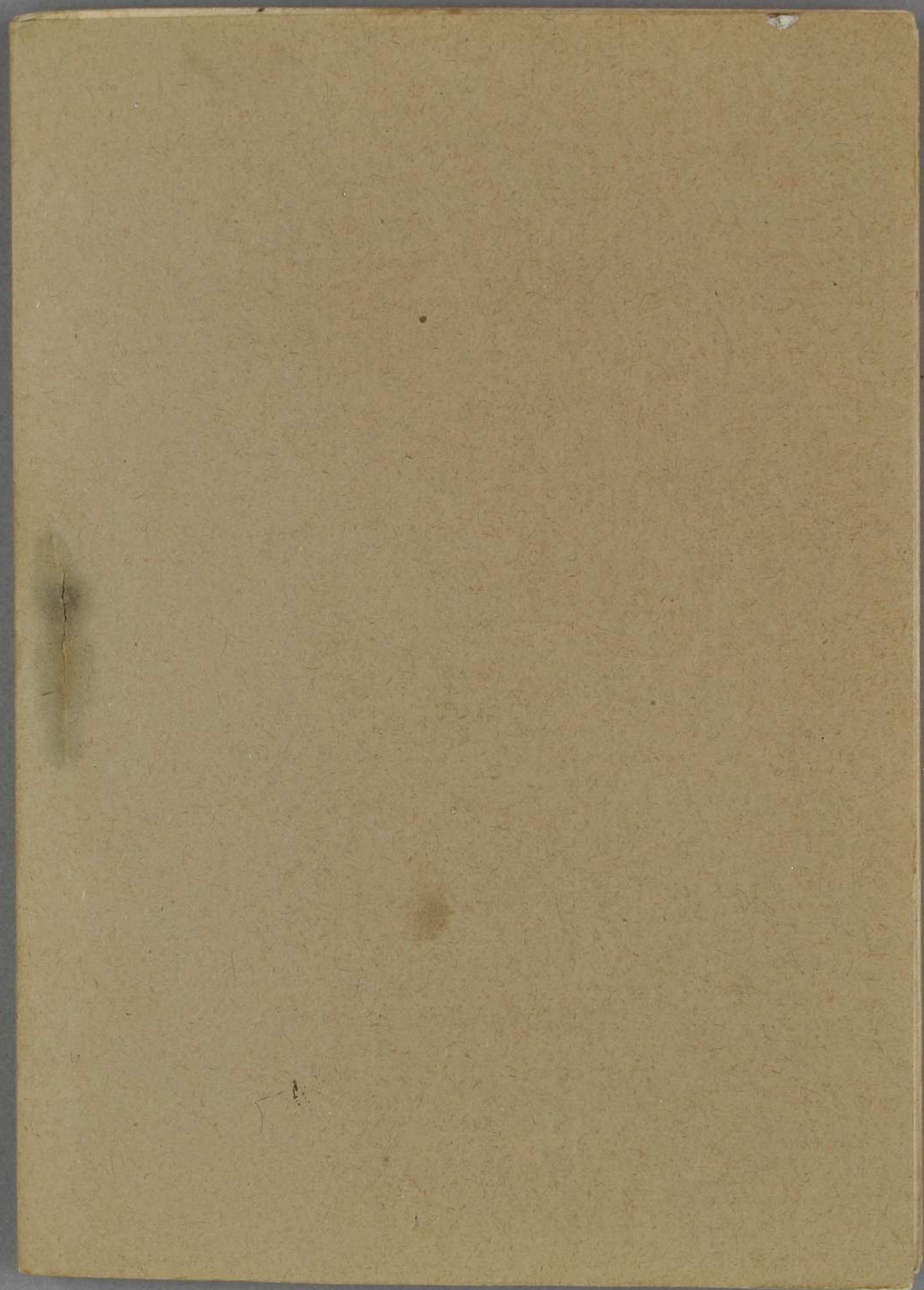
55

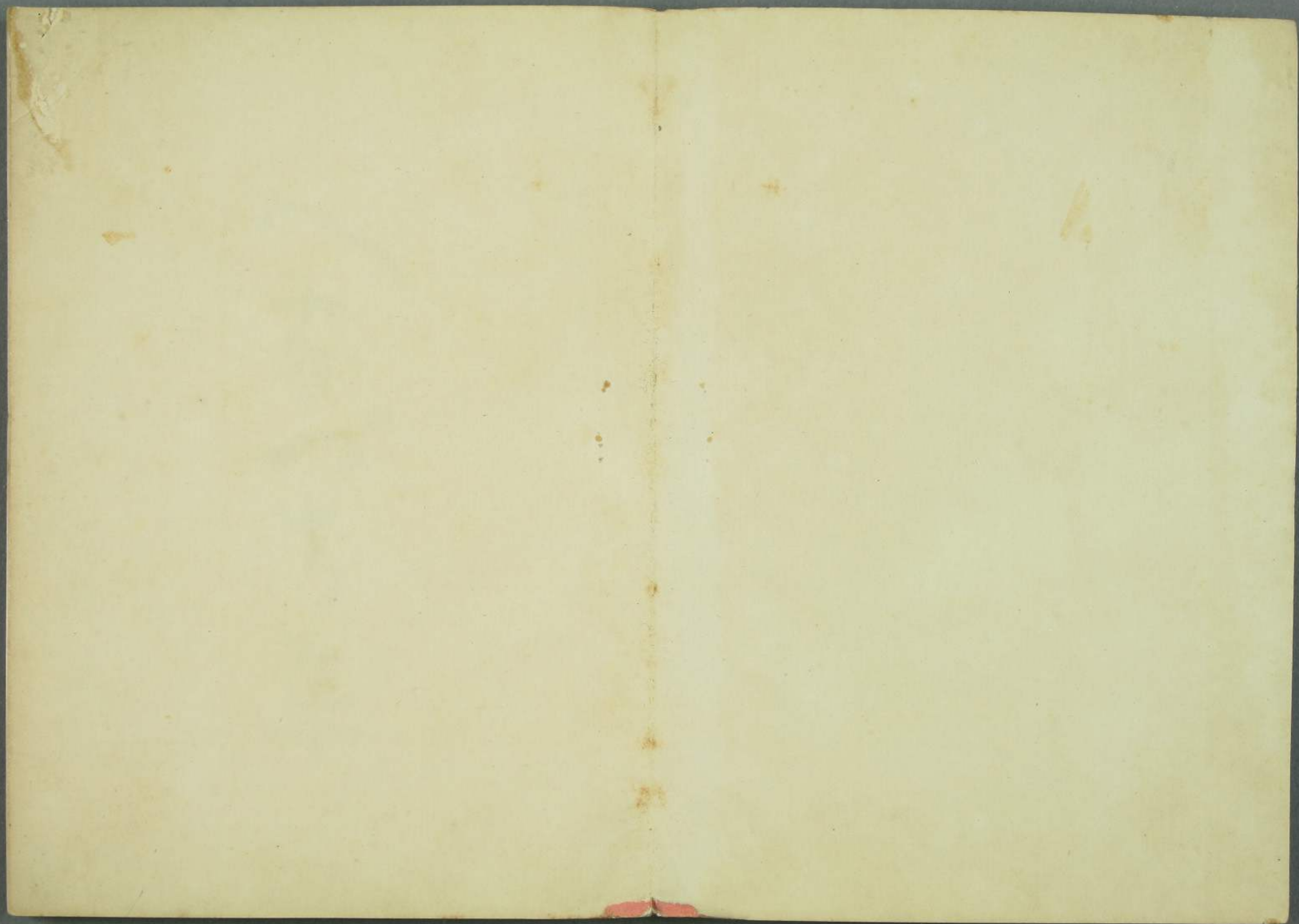
60

65

70







し
あ
ぶ
ら
き
集



これのみは人の國より傳はらでミユーズを受
けしイチャツキの道

* * * * *

注解がつかねば知れず、歌かそも、三十一文
字腹いたかりし

ヤツと出で一夜を明かした今日

はしがき

一 はしがき杯、餘り讀んで面白いものに非らず、書く御當人も餘り感服はしないものなれども、お刺身のツマと外套の肩掛け、丸て婆さんの所謂オハヤシにするも、少しく物足らぬ氣持もするので、二ツ三ツなぞくツて置くべし

一 此集の滑稽多くは諷刺に出づ、蓋し滑稽の上乗なるものに非らずと雖ども、讀者をして、何だコイツめと怒らしめ、又は成程フ、ンと笑はせる位の、魔力？は此

間に無き事もあらざるべし

一 昨日は入院匆匆から、病氣歴史を書かされた揚句が醫師の診察、ヤレ立ツて見る据ツて見る、疊の筋を一直線に歩行けとの果が、裸躰にされて、躰重器に暴されて、躰量十二貫四百二十目餘とは、早何ともお軽いことで御座ると申しても、筆路輕暢など云ふ次第にもあらずと知るべし、午後三時からが鼻耳科や眼科に引廻されて、君の目は複雑な眼とは難有い仰せ、これでお許がヤツと出で、一夜を明かした今日

一 朝早くからパンを食せた、難有いと思つた跡が、胃液を試験すると云ふので、太い護謨管を口中に挿入され、息はツマル、胸は悪し、鼻汁は出る、涙はコボれる、丸でハヤ氣のきかぬ首縊の躰で、其苦が市村座の三悪道、これも確かに詩壇の諸先生方に悪口叩いた因果觀面と、先づ怒られぬ先から懺悔々々如此

一 机上に薄紅色と白色の小菊花を小き藥瓶に挿みて、一葉の洋紙に『エホバに依り頼む者は憐みにて圍まれん』青山女學院禁酒會』とかけるが、絲にて括し付け

あり、ソコで僕亦『ヘナツチに依り頼む者は可笑味にて圍まれん』と此へなづち集の巻首に題せんとす

明治三十四年十一月二十二日朝、
麻布笄町赤十字社病院内科東二
の側八號室に於て

病久良伎志るす

一の次目

新歌人氣質論	一
夷茶月の歌	一五
短歌見本	一七
寛歌寛解	二〇
赤門鬼語之歌	三三
灸派	四一
短歌見本	五二
草笛滑稽評	五四
長歌	六七

二の次目

寄集珍派茶番	七二
俳諧歌	九〇
丑年の初夢	九六
鶴と詩人	一〇五
短歌八首	一〇六
三題 嘶	一〇九
詠 燒 栗	一一三
答古槐俳諧歌	一一五
短歌數首	一二七



正岡藝陽君著 (第二版)

新聞社の裏面

定價十八錢
郵税金二錢

新歸朝子君著 (一名、ハイカラ一亡國論)

滑稽なる日本

定價十八錢
郵税金四錢

新聲社藏版

珍派へなづち集
詩文

阪井久良伎著

新歌人氣質論

舉世術學の氣に酔ふと、誰れやらの痛憤、洵に御尤千萬の至、何事にもハイカラめかさねば、飯の喰へぬ世の中、横町の天麩羅の立食店ですら、一品二錢五厘の安西洋料理と進化せねば、立ん坊のお客を神集へに集へて、御店繁昌の御祈禱も上げられぬとすれば、文壇のハイカラ共、何所の馬の骨ともつかぬニイチエ坊の寐言を担ぎ出

(一) 集ちづなへ

して、ヤンヤと落ちを取らうとする今日、昔しはた公卿様の内職で、月雪花とシホらしい、御家流の三十一文字も、忽ち世話場に碎けて、八百屋お七の戀愛結構、お半長をむのクサリ、天の網島、情死文學、悉く歓迎されるれば、ついでに、枕や布團を詩料に持出して、濡場的一幕をも短詩の上で歌つて見せねば、お客が承知せぬやうでは、随分と溜つたものではない、ソレもコレも我慢はしやうが、
諸ハヤ驚木桃の木山椒の木とも云うべきは、身は姫御前のあられもない、明治の小町や海老茶式部の紅裙連が、あらよくツてよを振廻はし、詩美の上には遠慮は無沙汰と、蛙面水のシヤア／＼と、ねのろけ澤山の艶な所を、ペラ／＼と歌ひ出して麗々と文學雑誌の初頁

を塞ごうという凄い世の中、畫家にモデルの必要なる如く、アタイも情男のモデルが必要とは、どうやら弦齋居士の『釣道樂』お輕嬢の口吻らしい杯ど、驚くオイドン連は、先づ當分は隅ッこへ引込んで居るより外はあるまいテ、イヤハヤ
そいつも宜いが、何んでも早、若い師の君に若いお弟子、其クツツきの早きこと、水の低きに就くとは古るい、兆民居士の『一年有半』、マタ、ク内に賣切れと云ふ有様、何しろ遠くて近い男女の中、ソレが遠くはあらぬ師弟の御仲で、眞劍の戀愛詩を替古するのであるから、其目挑み其手は握り、口ツケの一段から進んで、力ある乳を探らせると云ふ大變な幕が出て、忽ち雑誌の上へ、公々然と(何某)と

云ふ連名で、おノロケ歌の四頁も出るのだから、豈にハヤどうも、寧ろ到底ギヤフンの至りとも云ふべしで侍りけるかなど云はねばおらぬではないか、オイ君しツかり頼むよ

ソレはまだ罪のない、お目出度連の戀愛談、ソナ初歩の幼稚の戀愛に何の詩美があらうぞ、單調の戀愛は、生息子^{キムスコ}生息女^{キムスメ}のやる、チンチイ戀愛、おい等のを一ツ見て呉れどの御詫宣、ハツと斗に低頭平身、畏こみ奉ツて拜見すれば、これハアあんたることかいなア、山や海をも誓に立て、渝るまいぞや渝るまいと、神聖な神様を證人に契ツた夫婦の仲らひも、一朝他に増す花が、(其花白百合か白萩かドウデもよいが)、出来れば忽ちお拂箱、牛をお馬に乘替へて、女房と

疊と同一視されたる女房もよい面の皮、ソレで大にノロケ歌の材料にありつくも、これが偕一年有半の壽命とは心細い至である、尤其詩人の十年の恩師からが此新派を拓かれたのだから、藍より出て、藍よりも青いは感心と餘り譽められぬ仕儀、サア此師の君の社中にあるイトハン連も姉様の戀愛、師の君のイチヤツキを、お手本としての御替古なれば、其進取の氣も定めて鋭かるべし、今にお父様^{トウ}これは文藝の爲めの結婚でござんす、文藝の上に頑固はキツイ野暮ですよ位の氣焔が出るかも知れぬ、とはサリトハ又こんなお女があるかいなではないか君、おいコラ

何にしる、こんな亂行(東洋的に評すれば)否詩人の本能が盛んにな

ツては、是れから第二の國民ともなるべき青年の男女等が行末、ただ心元なし、今や我國の形勢決して、安閑然とノロケて澄む時代に
あらずとは先刻承知のことなるに、今から此調子では、ア、先が案
じられると穴勝姑婆さんの假聲を遣うにも當らぬが、諸眞面目にな
ツて考へれば、太だ以て心細い至りなり、何にしろ歌で濡れ場を出
すとは、神も知らしめすことが出来なんてあらう、(尤も日本の神
様だ、キュピットやミューズではない)何も犬のツルムを見て、水
をぶツかける酒屋の御用を真似るでもあるまいと、差控へてはゐる
ものゝ、國家と云ふヤカマシイ頭から考へると、黙ツてゐるとツケ
あがるにも程があるので、少々氣骨のある青年文士、攻撃の矢先を

向ければ、コイツの云ふ聲が不思議でござる、文藝上に倫理を持出
すは野暮サ大野暮サ

これが西洋の毛唐連にお手本が無かつたなら、此戀愛黨も定めて口
を極めて戀愛を毒づくに相違なかつたであらうが、何でも早、西洋
は難有い、西洋の詩人がみんな戀愛をやる以上は、下地は好きなり
御意はよし、負けてはならぬドシ／＼やらかせと、得手の追風、大
ヘラの大きいちやつき、百年文藝の爲めとは、よく／＼も減らぬ口、
閻魔様に舌を抜かれぬ心が肝要ヂヤ
借問せん、西洋に戀愛文學が盛んだから、ソレを摸倣すと云ふなら
ば、西洋に強姦が流行すれば、強姦文學でも摸倣せねばならぬか、

有美とやら云ふ男の、天才は移氣なり杯、タツケたとを云ツて難有がる今日、西洋詩人は随分と姦通もヤツてゐる、さすれば戀愛も姦通戀愛でなくては複雑でないと吐かすのか、一點の良心ある以上はマサカに姦通戀愛を戀の美なるものとは認められまい、ソレを認めぬ以上には神聖なる夫婦の仲を、ブラットホームの立別れのやうに、ピイガラ／＼失敬で澄まされるものでない、矢鱈に箒主義を執ツて、ソレで同情に富んでゐる詩人と云ふことが出来るかに、お氣がツカレヤせんか

戀愛が詩人の本能だ、戀愛以外に眞の詩なしなどいふ議論は、どツくの昔我國の都々逸文士に依ツて實行されてゐる、何の今更らしく

遠方の髯おやぢの寐言を引用する迄でもあるまい、岩戸神樂の昔より女ならでは夜の明けぬ國、世の中は色慾二道より外はございません位は、そんなじよそこの落語家でさへ口僻にヤツて除けるではないか

倫理を履行すべき義務ある人間の、賞翫すべき文學である以上は、破倫理の文學は決して美とは、人間の皮を被ツた者は云はぬのである、否獨り文學の製作物の上斗でなく、單刀直入其破倫理の實修に勉強する詩人を排斥せねばならぬのだ

戀愛を歌はん爲めに、モデルとして一の情人を有するはマア／＼聞えてゐる、ソレをすら非認しようといふ野暮天でもござらぬが、又

更に一の新らしき戀愛を得ん爲めに又第二の情人を有し、又第三の情人第四の情人を得んとするが、合點のまゐらぬ所である、果して移氣が天才であるならば下等社會では無學の天才が鉢合せをしてゐるではないか

ま一ツ云ひたいのは、何でも一篇の詩を作るのに、一々モデルを要するならば、情死文學を作つた近松の如きは、幾度も身投げをせにやならぬのだ、源氏物語の帚木をかけた紫式部は夜這ひを試みぬばならぬのだ、何のデモ小説家が淫賣婦を買ふのに、人情視察を口實とする如く、自分で獨ギメに詩人にして終まひ、天才にして終まッての掃溜戀愛、ソレを渴仰し辯護する間拔な男も、チラホラ見える

とは、鼻の下の長いことごさるてや

だが、一步退いて彼れ獨ギメの天才詩人の胸中を察して見ると、無理もない點もある、ソレは此イチャツキ文學で衣食してゐる以上は、常に若々しい脂氣の乗つた戀愛を歌はねば、世間のニキヒ黨が承知せぬ、所で御本尊もモト拂々宗の隨一人であるれば、何しろ若いに越したとはないのはムリもない次第で、是れが貧の世帯に苦勞してヤツレタ細君が、子供をしツ背負カヨイのおシメ洗濯などは、アマリ艶なものでもござらぬから、況して借金カヨイの云ひ譯に浮き身を窶つし、花を飾りし身の皮も、七ツ屋の庫に禁足せられては、涙の雨に人知れぬ苦しみ、其上亭主の浮氣と三拍子揃つてゐては、これが細君た

るもの亦難いかなで、ハレタのホレタのとそんなノンキな馬鹿らしい事をウタクツてゐては、人間のミイラが出来て、博物館でも引取ッては呉れまい、やがて上出来て淺草の珍世界に出品されるは、眞ッ平御免、何しろ少しの手助けにボロも綴トギくり、飯メも焚マいたり水仕事、火の車の世帯をくり廻はす不憫さも忘れて、只詩美の上から細君を観察し、美でない艶でない、もツどヒツツケ、トツ、ケ、どは諸も馬鹿らしい、あんた氣でも狂はしやツたのかや位は、不平も出そうなり、かゝる次第に立至ッては、先生唯一の財源たるノロケ歌も出なくなる、ソコで更に古を棄て、新らしい戀女房とやらを引摺込みの先妻おんのけ、さいへ淋しき別の車位のお世辭でおッ拂はれ

に立至るので此所イヤハヤの三十や四十振替いても、中々追付く騒ぎにあらず
ヤレ醜業婦を店頭に曝らすは、文明の醜だなどど、喧ましく云はれるかと思へば、一方ではイロケは堂々乎として、大ッピラにやる、野鼠の物に隠くるゝ戀ではござらぬ、山猿の女を見ては袖を引ッぱる戀でござるが恐ろしい、淺草の拂々なら早速板圍ひと云ふ所、ソレが活字に化けて天下に散布するのだから溜らない、ア、臭いぞくく』もし僕が歌と云ふ者に關係のない、責任のない局外者なら、何のソナに追究して小言は申さぬ、世の中は腐敗してゐる、やり給へ〜君もツどヤツつけ給へ、何の恐るゝ所があるものか、高が女一匹殺

さうと活さうと御勝手次第、歌位でノロケるのは罪が軽ろいよ、何の耶蘇坊主の、一夫一婦論や、只表面的の偽善主義、女を見て内々涎を垂らしながら、ヤレ倫理でもあるまい、戀愛は文藝の本能、盛にヤリ給へ位の悪玉主義、ヤレ押せソレ曳けと戀愛車の跡押し位は致すてござらうが、生憎と歌といふ物の上に少々眞面目に信ずる主義がござるので、そんなお世辭は申し悪い、例の憎まれ者の蛇口佛心宗、勸化の手始め、まづ個様でござるチ、ンチンく

白馬會

腰巻を見る助平が寄たかり
女湯は智情感とも揃つて居

有感于歌壇之近事乃作

夷茶月之歌

夷茶月の

いちやの命が

いちやくくに

いちやつきませば

心若き

いちや女いちや男等

いちや集ひ

いちやあつまりて

いちや歌の

いちやつき歌を

歌あはせ

いちや刷物の

いちや雑誌に

いちやつかせれば

海月なす

若いちや人は

いちや讀みて

上もなく

いちや語り

いちやつきの

得咏まぬは

いちやつきの

得知らぬ

いちや誇り

いちや譽めに

いちや崇めする

其いちやつきを

いちや喜こばひ

語りつがひて

いちやの夷茶歌

人にはあらず

いちやつきごころ

友にあらずと

いちや尊とみて

いちやのみことを

反 歌

これのみは人の國より傳はらでミユーズを受けし
いちやつきの道

あんなチト此^コ方向^チかんせと引ツ張れば、あらハア厭⁺
だど堅くなッて云ふ(言文一致戀愛歌)

○
あ互ひの手と手と握り合ひまして霧が紅^{アカ}いとか何
とか云ひました(同譯鬼才女史之歌)

○

赤天狗さては般若のヒョットコの途に外道の我れ
なり世なり(明星調)

○
繪にも見よ誰れ腰巻に紅き否む趣あるかな鯉びど
る蟹(同)

○
こゝにして我が吹く法螺の音高くお江戸の空に鳴
ひいくらん(迦具土調)

○
みづからをお多福などゝ云ひますかタントおツシ

やいアラよくツてよ君

○
猪のしゝと思ひてうちし定九郎彈丸のたゝちのは
て恐ろしき(迦具土調)

○
よき音その布團のうちの狭きにもいきぐるしきま
で屁の臭くなる(明星調)

○
そろろにもお客集まりて夜は長し高座の鹿の鼻撫
てゐる(同)

イ 通行人が拾ったが、土の團子だから、何の馬鹿々々しいと捨て、
行ッてしまった、クアイノと囃したてた歌である

馬を下り酒の價を問ふなかれ此裏店に老いん二人ぞ

下宿屋を逐立てられて裏屋住ひの貧乏書生、ソレが一夜遊廓へ浮か
れて、サテ勘定となると文無しであるから、馬の車に乗ッてヤツと
思はぬ金が出来たので、急に大ヘラになッて、車から下りて小料理
屋に上つて太平樂を云つてゐると見れば、ソレで満足

さりげなく御籤さぐりてほ、笑みてさても春日の今日暮れ遅
き

これは堂守の老翁が、春晝の所在なさに佛前のみくぢを、いたづら

にひいて見たので、つまらぬ歌である

娘つれて詞に京の名残あり御僧いづこへ此川わたる

坊主と若い女との驅落ちを、渡船場で警官に咎められた馬鹿々々し
い歌

詩集手に豆の葉鳴らす人ふたり紀伊の霞は和泉より濃き

青鼻汁アチツバナをくツたらした子守が豆の葉をならしてゐる、ソレに詩集を
手にする村の悪太郎と二人伴れ立ッて行くのである

詩集は某氏の地理唱歌である

此スタイルで『繭玉手にホウヅキ鳴らす人ふたり龜戸の風は本所よ
り寒き』『猪口を手に小鍋立する人二人藝妓の顔はお客より赤き』な

どがある

春かぜに櫻はな散る層塔の夕べを鳩の羽に歌染めん

石川五右衛門南禅寺山門の場で、新駒屋が芝翫と改名した披露の出
し物を歌ったもの、鳩は鷹の誤である、イヨ一成駒屋ツ

いとせめてもゆるがまゝにもえしめよ斯くぞ覺ゆる暮れてゆ
く春

發狂の婦人が村の藁家へ放火しての獨語、ツマラぬと云へばツマラ
ないが、まづく新らしい所か

醉に泣く少女に見ませ春の神男の舌のなにかするとき

ある藝妓、莫連な女で、ソレが茶碗酒をあふツて男を罵倒したので

ある、イヤ埒もないもので春の神は金〇明神か穴守様でもあらう

其果に残るは何と問ふな説く友よ歌あれ終の十字架

これは西洋の地獄のヤケ酒で管を巻いてゐる所だ、マ、よ浮世はな
ど云ツてゐるのであらう

若うして市に人よぶ宿世もつ子今日五日目の亂れ銀杏よ

高等地獄の述懐と評した人があるが、僕は此説に左袒する、銀杏は

小栗風葉の『英吉利銀杏』の銀杏である

これちひさは是れ覺束なこれはかな覆盆子のほこり梅の實の智
慧

下句がマジい、宜しく『これちひさこれ覺束な、これ敢果な、蚤の

『聖丸、蚊の臍の智慧』とあるべき所だ、自分の述懐と見ゆる

さらばなり子は痛みもつ此門出母よ世によき名を強ひますな

これは常人同志神聖がる戀愛病にかゝつた墮落娘が、かけ落の門出に
残した文の代で、當世娘の墮落を歌つたものである、川柳に『新派の詩よみ覺えたを母案ず』はコ、を云つたものだ、頗ぶる大膽な作でト誰れやらの假聲が遣ひたくなる所だ

赤天狗のさてはおかめのヒヨットコのつひに外道の我なり世なり

或る主觀を具象的に現さうと云ふ傾向の中でも、これは近頃尤も新しい作風の一つ、假面を假つて來て自己の運命を叙したのがこの歌。

赤天狗の面は、派手に艶な色で、聞嚙りの生文學と生色彩論とで、一世を駄法螺でゴマかそうとしてゐる。ソレがおカメの假面に戀着したので、ヒヨットコ面と化けた、が、世の攻撃でトウ／＼外道の面のやうな運命になつたと、コボしてヘラズ口を敲いてゐるのである。

かたちの子春の子血の子ほの子いまを自在の羽なからず

形の子とは、女と云ふものは、れつくりに浮身をやつす者であるから、形の子と云ふた。春の子とは讀者の解釋に任せよう。血の子は血の道の子。ほのほの子は嫉妬の人と云ふと同じく皆浮氣娘を云

ツたものである。今を自在の羽と云ふは、圍爐裡の自在鍵に羽が生
ねたと云ふことであろう、文福茶釜に毛が生ねたと云ふ故例もある
から。

一説には三保の羽衣の天女が、癩でも起して苦しんでゐるのを歌ッ
たものだとの事、いづれでもよかろう。

さ[△]け[△]な[△]春[△]を[△]眞[△]白[△]の[△]鳩[△]の[△]羽[△]の[△]う[△]ら[△]に[△]み[△]だ[△]れ[△]し[△]文[△]字[△]の[△]な[△]か[△]ら[△]ず[△]ヤ[△]
詩人

内容は別に注意すべきものでもないが、鳩といふ字にツレ、詩人に
キミと傍訓したのが新らしい。此筆法でゆくと明星と書いてヨバヒ
ボシとかノロケウタとか傍訓するやうになる。

あ[△]づ[△]ま[△]や[△]に[△]水[△]の[△]音[△]き[△]く[△]藤[△]の[△]夕[△]は[△]づ[△]し[△]ま[△]す[△]な[△]の[△]低[△]き[△]枕[△]よ

ヨウ／＼、おやすからざる歌である、此所十五分間無言と伯圓の假
聲でもつかひたくなる。

總じて歌と云ふ者は、内務のお役人にも分ならず、世間の文士と云
う側にも分らないから徳なものだ。コレを都新聞の探偵實話堀の
お梅的に、挿畫でもして書き立てるとスグ風俗壞亂發賣禁止と來る
のである。コレは此歌一首にのみついて云ふのではない。

ひ[△]と[△]つ[△]血[△]の[△]胸[△]く[△]れ[△]な[△]る[△]の[△]春[△]の[△]い[△]の[△]ち[△]ひ[△]れ[△]ふ[△]す[△]か[△]を[△]り[△]神[△]求[△]め[△]よ[△]
る[△]

我國は八百萬の神様があると聞いてはゐるが、神様の夜這は此歌が

始めてだ、多分グリーキ時代の神様であろう、ソレとも東京近在の神様であるか、作者でない限は分からない。

ぬか白きひじりよ見ずや夕ぐれを海棠に立つ春夢見姿
女人の罪業深きは、佛法で夙に説いてゐるが、此作者は坊主を墮落させようとしてゐる恐ろしい女だ。

注○解○が○つ○か○ね○ば○知○れ○ず○、○歌○か○そ○も○、○寝○言○三○十○一○字○、○腹○痛○か○り○し○。

これは余が詠んだのだ。以上のやうな歌はまだ澤山あつて、だんく極端に走つてゐる。解釋するもイヤになつた。ソコで評言の代りに其歌躰を學んで一首よんだのである。

赤門の文士馬鹿もんだらけなり
天才の少し抜けたが文學士
文學士ぶんがくし文士泣なとも語呂で云ひ
學士臭いおくびの出るは青い也

近有嘲咏短歌爲見戲者
乃作赤門鬼語之歌

天地の
さにつろふ
いづれの時か
赤門あたり

さまよへる
其鬼の
今の世に
痴者シモンの
其歌は
其歌は
吾が説ける
久方の
垂り下り
犢鼻ダブサキ禪ゼンの

赤鬼ありき
人に語らく
短歌ミチカワタよむ
數多こそあれ
湯を呑む如く
屁玉の如し
赤髯歌は
天津御空ゆ
ぶらさがりなる
長き長歌

其歌は
みゆまりに
御尿に
いかで彼の
鼻尿を
三十あまり
咏ウタみなせる
鯨シヤチホコ銚シロ立ち
企てゝ
今ゆ後

ミユトズミユトズの神の
化れる歌なり
なれる歌なり
貫之景樹の
ひぬり丸ろめて
只一文字に
短き歌の
立つともいかで
及ばんものぞ
世には流行ハヤらむ

肺ベスト
旨とする
須らく
アベチエデの
兎も角も
ごまかして
子々^{ボヲ}なす
千五百卷
其著者の
其歌の

流行らんことを
世の歌人は
短歌やめ
いろはを學び
大學丈は
卒業すべし
横這ひ歌の
よく讀まざとも
名の一通り
面白き所を

ちよいくど
獨樂にする
つく反吐の
オIヅヲIス
至るまで
云う位
牛がまる
だらくど
何事も
蝶々に

ぬき書にして
バイロン扱は
ゲIテは愚か
ヘチヤモクレンに
己のが弟子ぞと
威張りに威張り
ゆまりの車
長く延ばえて
神様づくめ
薔薇に筆に

羽衣に
裸か女に
キエウヒット
山の神
戀の痴話
舌たるく
利口ぶり
ヒ子クワて
馬琴調
讚美歌に

天津少女に
星に白百合
嵐の神に
蛇の咀ひに
可成甘まく
其他は多く
哲學臭く
咏み下すべし
漢詩に雅言
引導口調

灰殻の
瘦馬の
ぶらくと
其代り
分らない
さりながら
世にめづる
と思ふべし
焉んぞ
文壇に

へボ直譯語
馬の罌丸の
振廻はすべし
チチンアイく
髯の寐語ぞ
面白がツて
馬鹿者多し
若し然らずば
廿世紀の
立つを得べけん

あはれ世の

しれ者等

ふり廻はし

樽御輿

をかしやと

我もまた

きくらげの

かくろひて

歌に述べまし

短歌よむ

三十一文字を

饑鬼が擔カッげる

ろれにもまして

鬼の笑ふに

かゝる駄法螺を

耳梨山に

ひとり思を

〇反 歌

長からば長きまにく短かくば短かきまにま然シカに

はあらむか

人の國の頭を借りて歌よまんは己が舌切りて黙モダあ

るに如かず

灸 派 (狂言)

ワキ、これは此あたりに住居致す歌の横好と申す歌よみでありやる、サテも此頃の文壇は、何かと珍奇流行と申すことでたりやる、ヤレ

舊派でありやるの、まッた新派でねりやるのと、ソレはくく七八釜敷い事てねりやる、身共も自我の一派の開いて、世の明盲ら共を一ッ驚して呉れうと存ずる、ヤレ暫時シバラフこれに落付いて居やう

シテ、これは歌灰殻と申す歌よみの行脚でありやる、世の中には頑固極まる舊弊の歌よみ共が多いに依つて、一つ和歌の革新の企て、何かな戀愛宗の本山、祖師の大先達は身共でありやるど、後の世の歌學史になど歌はれたいが、年來の希望でありやるに依つて、かく戀愛宗の難有さを世の中のイチヤ女イチヤ男の輩らに説き諭いて廻るもの、腹が減つては軍さにもなるまい、幸ひこゝに草庵がござる程に一ッ麥飯の馳走になど、與かつて、疲れを休めたいものであり

やる

シテ案内を乞う

シテ、たのも、案内も

ワキ、誰タをか門カドに案内アナイがある

ワキ門口に出て来る

シテ、これは諸國行脚の歌よみておりやるが、路に迷ふて、いかい難義の致しておりやる、お情けにどうぞ一夜のお宿が御無心致したうありやる

ワキ、ソレはくく定めし難義の致されたであらう、先づ草鞋など解いて、ゆるりと休息なめされい、いざくく通らしめく

シテ「心得た、許さしめ、エイやつとな

兩人座に着く

ワキ「サテ個様にお宿の申したなれど、見らるゝ通りの茅屋でありや
るに依つて、何も馳走のない程に、柴など折くべて一こん進ぜうと
存ずる

ワキ「酒を勧む

シテ「あつとアりまする〜、これは灘の一本木とても申しませうか、
結構な御酒でおいやる、所で身共も一ツお酌など致しませう

シテ「酒をつぐ

ワキ「ちツとありまする〜

シテ「サテ御主人に申しまするが、色々御懇の蒙りました御禮のし
るしに、身共も歌よみの商買でありやる程に、何か一首歌ひまして、
興の添えたうござりまする

ワキ「それは一段と興の深いことでありやる、いざ歌はしめ〜

シテ「心得た〜、まづかやうでござる

吳竹の枝間々々に雪ふりて

一しほ奇しき眺めこそすれ

(参照——白雪の岩間々々に降りきて一しほ奇しき眺めこそすれ——謙澄)

ワキ「ヤンヤ〜、其歌は雪中の竹を咏ませられたのであろうが、前
の内務の大臣ねとが聞かせられたならば、定めし喜ばるゝことでありや

ろう、時に身共も一首浮かんでありやる、先づ個様でありやる
あぐらかく圓遊鼻の太鼻フトバチの

幅とるおもはをかしかりけり

(参照——黄金なす菊の太花八百花の花さく園はまばゆくありけり——左千夫)

シテ「これは一段と面白うございる、所で身共も又浮かんでござる、
かやうでござる

七草の七日の筵ムシロ我れ寧

況んや到底豈圖らんや焉

(参照——小さなる望をすて、我れむしろ此島守にならんこそおもふ——信綱)

でござる

ワキ「ヤンヤ〜、所で又浮かんでありやる

山賊は舞臺の上手カミに賤メの女は

其真シマん中に我は下手シモに

(参照——遠富士は闇の彼方に月影は森の此方に我は殿戸に——躬治)

シテ「又咏んでござる

婆オカさんのお腹オカの皮のたるき哉

皺シワところ〜垢カところ〜

(参照——梅咲ける野中の水の清きかな石まころ〜苔まころ〜——薫園)

ワキ「身共も

姉アネえさんの紅ベニい襟エリの玉結タマユビび

ワキ「も一ツ序に浮かんでござる

たらちねの母親にさへ云ひがたき

おならの夢をよべ見つるかな

(参照——我世こゝにこゝにしばしの魂産靈たまの直ちのさて覺束な——躬治)

シテ「チトむさうござるが、一段と腹の皮をよつておりやる、

蚤飛んで、又一つ飛んでかいまきの

襟にべとつく垢に入るく

(参照——鳥飛んで又一つ夕榮の空を横ぎる雲に入るく)

ワキ「ヤンヤ〜

シテ「色々ど珍らしいお歌を伺ひまして、一段と興の催してござる、さりながら、世の中に詩人の本能と申して、詩人は戀愛を歌ひませぬと詩人らしいはござりませぬ、されば世に昔から行はれまする都々一など申す短詩は、皆な戀愛をタテに咏みまする、三十一字の國詩でも矢張戀愛を歌はぬ野暮な歌よみは、詩人とは申されぬものでござる、身共が、多年志としておりまする、自我の新派と申しまする物は、戀愛詩と申して、世の中の浮氣な女中衆が、ベタ惚れに惚れまする、桔梗の肘つき杯も贈られました例もござりまする、其濡事歌を詠んでおめにかきやうと存ずる。

ワキ「ソレは一段と奇妙でおいやらう
シテ「ナカ〜

其人にやすきお芋は喰はせながら

美しくしき尻よ嗅きも見ざりし

君が鼻我鼻つまみつける息

不浄の風のゆらぐとれもひし

(参照) 其人に高き思はさづけながら美しくしき手よ觸れも見ざりし

君が頬を我が頬ふれてつける息芙蓉の風のゆらぐと思ひし

ワキ「これはイカナこと、左様な尾籠な歌聞ともござらぬ、戀愛か蓮
臺か、何かは存せねど、内股膏藥のやうに、彼方^{アチタ}へベタ〜、此方^{コチタ}

へベタ〜、ベタついて氣味の悪いものは、身共第一に嫌ひであり
やる

シテ「ヤアハレ、御主人はキツイ野暮を仰せられますこととてありやる、
ソモ戀愛と申しまするは、ミユーズの神の教へ賜はツたもので、バ
イロン業平など申す斯道の先達が、傳へ弘めまいた神の正道であり
やる、世の中に若い男と女との關係は皆この戀愛が原でありやる程
に、ニキビの吹出まする今の世の中の若いイチャ女イチャ男の人々
が、殊の外信仰いたしまする、何と主人にも、御歸依なされてはい
かいてござりまする

ワキ「左様な^{タラコト}誑言きく耳はねりない、身共は灸派と申して、此ヤイト

を、かう世の中のイタヅラ者に据えて熱い目を見するのが宗旨でねりやる

シテ「戀愛と申しまするは左様にヤカセらるものでおりない

ワキ」そのツレまだぬかすか、ヤイてこますぞ

シテ「許させられい〜

ワキ」ヤルまいぞ〜

○

財産を差おさへんのあらかじめ利の天びくか高利貸の金(草笛、服部調)

○

風船に寝て試みん吾が夢は天にのぼるらんか地にねつらんか(同、落合調)

○

山かけの谷には朽ちむ死ぬとあらば此大勢に笑はれてこそ(同、猪之吉調)

○

こゝろいれて今日予初湯の初姿おのが亭主に惚れられん爲め(同、某女史調)

草笛滑稽評

一々『草笛』の歌をヤキ直そうと思ツたが、ソレも面倒、且は不自然に陥るので、先づ十二枚評などと云ふ洒落れな趣向を避けて、手あたり次第に、口網一流の悪口を叩かうと云ふのである、が、人の歌を冷笑すと云ふの失禮千萬な話ではあるやうだが、土臺嚴格なる批評の下に、真面目に檢閲して見る氣には、大阪詞でドムならんに依ツて、冷評される歌其物は、已に詞形の上なり、内容の點に於いて多少の弱點あるものとアキラめて、風邪の神にでも取付かれたと思へば、ソレで澄むと、友達甲斐に笑ツて置いて下されや

作者の名は一々に指摘しない、煩はしいと、餘計憎まれるのも辛らいからと、中々これでシホらしい所があるのです

ゆきかひの日月殆どひまをなみ只今日安く今日も暮れたり

僕は此歌を、どう考へても郵便脚夫の述懐とより判ずることが出来ぬ、今日安くは日給が安いとも見れば見られる

導きの招ぎの影の認めあへず、されどわが世のをしくやは

あらぬ

此歌にはサスが天才の僕も大に手古摺ツた、是は大方市ヶ谷の堀端でも通ツて、松並木で死神に取り付かれた男が、生死二途に踏迷つてゐる心持とより判じることが出来ぬ

男の子われ百世の後に消えば消えん罵る子等よ心短かき
「心短かき春の山風」飛んだ茶番の蒲生氏郷でござるテ

旅に寝て宿世相似し物語「親もあらぬ子誰に寄るべき」
云はずと知れた養育院ものサ

小夜中にひとり目ざめてつくつくと歌思ふ時は我も神なり
上句夜中に獨り目ざめてつくつくト云ひ出しては、どうしても小僧
が寐小便を垂れた感じを歌ったとしか思はれぬ

天地のさらに開けし心地して力満みたるあさぼらけかな
手力雄命の述懐

ともし火を書に捲ひて山窓の障子にうつる梅の影見る

小學生徒が幻燈を寫してゐるのだ

來てはわれ幾度船をながむらむ岸の岩根の一本の松

此松を猪之吉船見の松と云ふと、名所圖繪にありそうなり、オット
人名をかくのではなかつた

雨をいたみ濡れたる袂まぼりく越ゆる山路に雉子しばなく
濡れたる袂しばりく杯と、少し仰山すぎて芝居の定九郎めいてゐ
るではないか

若き子の疾くも老いたる怨みにと縁の神の御社とぼたん

一首の詞形も至極幼稚である、コンナ手合ひがバアジャンや向嶋の二
六運動會に飛出す玉である

駒ながら歌を手向けてすぎにけり關帝廟の有明の月

氣早の江戸ッ子は馬と歌と一所に關羽様に献上したのと思ツた、關帝廟と云ふヤツが、日本の正清公様と同じものだから、あまり難有くないテ

山に入らば心淺しと笑はれん兎にも角にも苦しかりけり

サリとはお氣の小さいに驚く、笑ふ奴ら糞を喰へと云ふ、神田子的にも似合はんじやないか

數寄屋へと庭下駄はきて小走しれば袖のあふりに茶の花ち

りぬ

サア大變なお轉——イヤどうもこれは失禮、活潑なお嬢様、ナニで

はない細君だ、よし／＼昔のお嬢様だ、定めて數寄屋の廂へ額をぶツつけて、根太を踏ぬく海老茶式部でおはしたんめれであらうと思はれる、ナゼこんな荒々しい舉動を歌ツたものかしらん、なにそこには蓋がある、ソウか成程、ほ／＼と獨り笑みをして庭の茂みにいゝ人が隠れてゐるので、アラよくツてよどか何とか云ツて大急に駆け出したのか、それならばよし／＼、庭に苔が生えてゐるので滑らぬ御用心々々々

人知れずおのが心をたぐへやると服紗に包む白菊の花

サアこいつも分らない、こんな物を貰ツた男は、定めて狐につまゝれたやうに、服紗と白菊の花サテ何であらうか杯と、ヤニ下がツ

て、腕ぐみて考へるか、それとも服紗の中に澤山のお禮でもはいッ
てゐると思ひの外、何んだちヒイ様のソ、ツかしい、紙包と白菊と
取違へたは大方、近眼でゐるからだらう杯との推察、中らずと雖ども
遠からざるべし

一葉散りし紅葉拾ひて力なき秋の夕日にすかしても見つ
五句すかしても見つとは、どうしても芳香的空氣の音としか思はれ
ぬ、ドタイこんなスカス杯云ふ詞をおヒイ様は用るものではないの
だ、それはソレとしても、丸で小供がアフリ出しか、スキ込み文字
入の西洋紙をスカして見てゐるやうでラチもない歌

四十九里浪路の上は問ふなかれ佐渡はよき國金山どころ

コレで歌でございと云ふなら、世の中に歌よみ杯贅澤な毛多物は飼
ツてをくは費えの至りだ、昔からの追分節や地方の俗謡を片ツパシ
から三十一字にヒキ直せば、ソレで十分

妹が家に珊瑚の鞭を忘れけり五條の橋の春の夜の月

一向に餘韻のないツクリ歌だ、宜しく「芋が家に三錢のステツキを
忘れけり牛込橋の冬の夜の月」とすべし

百年をそれにあやまつ命ありと知らでやさしき歌よむか君
サア事だ、有名の難物の歌だぞ、「それ^{△△}に過^{△△}まつ」など、川柳的に
ソレと誤間化す所はサスが、鬼才たる所か、此歌はどうしても人拂
々の女房が、亭主を諫める口吻が見える

夕暮を花に隠るゝ小狐の和毛ニヨグにひく北嵯峨の鐘
小狐を半玉と解して見れば、よくわかる歌だ、だが和毛ニヨグをいかして
解くと、田紳士の外套の毛皮が狐であつたのであらう

追羽子の群れにそむきて壁により手毬からぐる前髪の君
蛇喰うときけば恐ろし雉子の聲か

強ひませし屠蘇に染めたる頬をなでぬ亂さじとする髪の一筋
いよく蛇雉子に近くなりますぞ

もえてくかすれて消て暗に入る其夕映に似たらずや君
コケが遠方の火事を見物してゐるやうだ

朝風を袖に防ぎてやくまばし妹に見せけり初日子のかけ

此奴コイツが儲わからぬ歌よ、男の袖屏風などは餘りよい圖ではないよ、
此妹赤ん坊で抱かれてゐるやうだ

吾妹子の茶筌かざりの初手前はつ元結のさても眞白き

「正月は己のが女房にチツト惚れ」的、否大に惚れの的、某君一升おで
り給へ

はぢらひて湯槽を出づる妹のごと水に影さす白あやめの花
かう高師直的に聯想されては、無心の花も定めてあらよくツてよと
申すべし

小柴垣隣の琴にききとれて思はず折りし花うばらかな

此色男の手は田吾左衛門の掌の如く、餘程皮が厚いと見えたり、若

し然らずば下の句「思はず折りてトゲたてし茨」とか「思はず茨を折
りてアイタチチかな」などなるべし

岩清水たちより見れば其底に瘦せし吾影、老いし松影

卒塔婆小町を男でいかうという凄い歌なり、イヨ成田屋

鯉にとて投入れし麩の力にも立わかれたる浮草の花

初句の鯉にとてのトテからが拙ない詞だ二句が投入れし麩ので又キ
レて、三句力にもトヤツたお手際などは、只々敬服の外はない

床の間にたける香爐の烟をも残して夏の夜は明んどす

烟をもものをも厭な詞サ、香爐の烟と夏の夜と戀愛でもしまいし

蚊のまつげ落つる音をも聞く許り座禪の御堂小夜史にけり

又^{△△}をもが氣になるナ、蚊の眉毛に對して、「蚤の翠丸見ゆばかり座禪
の御堂月すみ渡る」なども好であらう

立寄りて蟬のなきがら踏みしかな一葉散りたる桐の下蔭

犬の尿ならて仕合、墓がへるのなきがら杯よくあるヤツサ

奥山の牡丹のふる根巖により白き花さく我世こゝにへむ

獅子の精靈實は何の某と役割がつきそうだ、五句こゝにへむ^{○○○○}ポコへ

ナナ調子

山深き春の眞晝の淋しさにたぐりても見る白藤の花

白藤、女の名に非らず

今はさは君に任かせん君故に若き命の置所なき



生命保險會社の役員ならば喜ぶべし

松の葉の廣かりなばと思ふかな君と二人の歌かきつづく

愚なことを云つたものだ、昔から松の葉は細いものと極まつたもの、
花は紅柳は緑、松の葉は細くしてとんがり、蓮の葉は丸くて大きい
位は杯かくさへ馬鹿々々しい
モットやる積であつたが、こんな駄歌にからかつてゐては際限がな
いで、謹んで白旗を掲げて降参した

○宿于久良伎之家、秋雨終朝無聊甚、

戲作長歌一篇

品川 臣 繪 麻 呂

上の句は 久良伎がつくり 下の句は 我れ續けんど

歌 袋 底傾ふけて 歌口を 絞りつくせど

其度に 頭は勝ちて 脚かるく 庭の檜葉の木

南天の 赤き木の實も 養鳩カヒバトの 白鳩までも

言ひつくし とふく庭の 竹梯子 かづき出しても

醜歌シコウダの 屑歌なれば 耐へがたみ 久良伎語らく

頭疾カシラヤみ、今は眠たく、成りにけり

誑言タラゴトつかで、君ぬまれとぞ

と唸めきて 小夜着をば 引かぶらひ 雨の日の
 晝寐の夢に 待つ人の ありと急げば 華胥の國
 莊子の宿の あき枕 探り出して おつき合ひ
 夢路の旅に 急ぎけるかも
 * * * *

○十一月十一日紀事之歌

くちあみ

長月の 二日長雨 降やまず ドシヤぶるまにま
 品川ゆ 訪ひ來し鯨を 落椎の 強ひて留めて
 新親治 不破の若子と 三人して 火桶の下に
 三ッ鼎 あぐみ並み居て 鏡ひ歌 久方ぶりに

よみ合へば 唸めき苦しみ おのもく 頭を抱え
 十分と 限りし時も 幾何學の Aの自乗と
 夜くだつに 尻の据らぬ 若子より 先づ逃出して
 紙屑の 醜の屑屋も え拾はぬ 屑歌合せ
 其まゝに 流れはてたり そのあした 歸らひかぬし
 鯨いはく 人のよみ歌 かにかくと 論つらへども
 偕己れ 咏まんとすれば 大ていの 難産ならず
 悔しかも 憤ほろしも いでおのれ 丈夫男の子ぞ
 長歌は アツと云はせて 短か歌 グウと云はせず
 ヨカ歌の ウツ、イ歌の ハチ歌を いざや咏まんと

鼻柱	ひたもの強く	二人して	雨ふる庭を
キヨロくと	眺め見渡し	歌玉の	落ちもやすると
氣にすれど	主人のつとに	とりつくし	あさり果たる
ろじゝの	空庭なれば	いかできは	歌ぐさあらん
是非なくも	梢にたてし	竹梯子	軒に尿まる
家鳩の	影を求ぎつゝ	十首とは	得も咏み出でず
しかすがに	連歌つくと	頭やみ	脳疲えたる
主人をば	挑み責むれど	水沫たつ	シヤボンの玉と
こもやがて	跡なくなれば	己れまづ	先に御免と
伏猪なす	萩の小床の	秋の夢	獨結びて

ぐうくと

夢の御國に

出立にけり

○

山の手は諸式を高め、買物を、せす人乏し、市人なげく
 松立つと、家の男の子と杭をうち繩からげして手をいためつる
 年の暮は心落ちるぬ人多み、今朝の新聞尙讀まであり

○

詩集では助子女史のがいッち賣れ
 先師は業平今はバイロンのお弟子也
 霧紅う降れど野良出合贅をいひ
 美しき靄よと亭主を烟にまき

弱きくなど中々ふといあま
新派の詩咏み覺けたを母あんじ
師の君が背の君となるきつい事
其最初まづ董から封じ込め

寄集珍派之茶番

(大序 詩學山だんまりの場)

本舞臺、一面の岩石の畫割り、上手に山神の祠、下手は藪疊にて見
切り、山嵐をかぶせたる時の鐘にて幕明く

こゝに賤の女歌の玉子、箱を抱えて下手より出で、上手より心の花
雅樂之助狩装束弓を持つて出て舞臺の正面にて突當り、互に驚く中、
玉子箱を取落す、互に取らんと探り合ひ突除ける拍子に、玉子山神
の祠へよろける、祠の中より妖星夜叉五郎四天に大百の鬘、山賊の
いでたちにて、二人の中に入る、其時下手藪疊より七日之助、菰を
かぶり伺ひ寄り、四人からみ合ひ、遂に箱を開き中なる白旗を奪ひ
合ひ、夜叉五郎は上手に、雅樂之助賤の女を中に、七日之助下手に
すまひ、互にキツと見えあひて幕

(二幕目 夜叉五郎屋敷之場)

本舞臺、二重屋臺上手に障子をハメ、正面は襖、裸躰畫を壁に掲ぐ、

總べて夜又五郎屋敷の場

幕明くと、奥方並に子分大阪紋太居並んでゐる。奥方と子分と色々物語あり、ド、揚幕の中より、

お上使のお入り

と呼ぶ

奥「ハテ心得ぬ、お上使のお入り、何はともあれ我夫に申し上げん

ど上手に入る

正面の襖を明けて、夜又五郎悠々と出で來り少し下手に座す、子分紋太其後にかしこまる、鳴物につれて上使花道の中程に來る、應答

如例、上使着座

夜「お上使にはお役目御苦勞に存じますつきまして今日ね上使の御主意、承まはりたう存じます

上「上使の趣、餘の義にあらず、一ツ此度某社より發行せし雜誌第何號風俗壞亂の咎めにより、發賣禁止申し付くるものなり、内務大臣何の某判、委細かくの通り

夜「ハテ心得ぬ仰せかな、シテ何故に、發賣禁止仰せ出され候ひしや

上「何故とはいひがたけれど、彼の雜誌に挿入したる數葉の裸躰畫、是等正しく風俗壞亂

夜「コハいぶかしき仰せなり。シヨモ裸躰畫は西洋美術の神秘にして、其が曲線の美は歐洲畫伯と云へども、容易くは畫きなされず、先進文明國の夙に最上美術として尙ふ所、それに何ぞや汚はしき、風俗壞亂の名稱に、發賣禁止を濫用し給ふか上「賢こげに申されたるよ、ソモ名を藝術の美に借つて、彼の淫猥士女の憐れを買う、これぞ正しくエセ文明の墮落藝術夜「あゝら問答無益、此上は文藝上より余が態度を明かにし、某博士の明答を望まん上「其の答、博士をまつまでもなし、ソレ男は裸百貫なりと云へど、此寒空では覺束なし、まいて自轉車乗ですら、臍を出すさ

へ、キツイ禁物、それに何ぞや、大膽に、かよわき婦人の身を以つて

一同「裸かで道中が(チヨン)なるものか、幕をひくあとシヤギリ

(三幕目 詩集村郊外の場)

一面の平舞臺、松並木に畑を見せたる畫割、上手に葎賣茶屋、下手藪疊在郷唄にて幕明く

百姓田吾左衛門頰冠り鍬を荷いて出て來る

田「ヤレ、疲勞くたびれた、かう年をどつては、ちつと畑けをうなツてさへ、腰が痛くなるやうでは始まらぬ、まア一息とやら

かろう、所で根岸の旦那様がお仰しやツたのに、世の中で政治家なると威張つてゐるが、あんな者は俗物の骨頂で、詩人に越すものはないとのお話、うかへツて見ればソツナものではあるけれど、其詩人と云ふのも昔の人麿様や西行上人のやうなお方は全くユライに相違ないが、此頃の青二才が詩人がる世の中では反ツて政治家や地道な實業家がユライかも知れない、ダが昔しの人ほうまい言を云ツたものだ、詩を作れより田を作れで、何でも實業をウンを奨励しなくては駄目の皮だ、お上てさへ此頃は金が足らぬと云ツて外資輸入とお騒ぎなさる御時節だ、お勝手元不如意のお屋敷でコロリンシヤンの爪調べと云ツたやう

の文學沙汰、それも立派な文學ならまだしも國の花ともならうが、山師の實業家やハイカラ破落^{ゴロ}付きの政治家と、助平詩人のデモ文學、よい釣合かも知れないが、諸々困つた世の中じゃ、村の太郎作の息子さへ、此頃では分らぬ歌にウキ身をやつし、ヤレ戀愛だの詩美だのと、親の汗で暮らすさへ難義な今日とも思ひ知らず畑へ出ると色が黒くなると、丸で女かなんその與太公じゃ、ソレに村の持丸様の御子息も、お江戸の雑誌の見やう見真似、井から湧くかなんその様にお金をパツバと活字屋へぶち込んで、文藝の爲めとやら頻りに夢中になツてござる、そして東京の詩人とやらのお太鼓を、喜んでおられるのは、諸々氣

の毒千萬じや

と云ふ所へ下手より、百姓空右衛門鋤をかたげて舞臺へかゝる

空「ヤア田吾左衛門さん、おめへ晝休みか、おらもチツトンべい
休んで行くかな

田「誰だと思つたら、空右衛門か、爺になツちやあ、仕方がねへ、
ソリヤアさうと丁度良い所へ来て呉れた、先きおれがひん抜い
た大根や人參があるから、あれを洗つて呉れないか

空「ウンお安いこんだ、何所おいたいあ

田「こゝにある、氣の毒だが手傳ツて呉れ

兩人是にて前の流れにて大根人參を洗ふ、詭への鳴物にて花道より、

紳士歌野拙羽織袴にて出で来る

紳「久振で散歩に出たが、田園の景氣はまた格別、何は兎もあれ
彼れなる茶店へ參つて休息致さう

紳士田吾左衛門と面見合せ

紳「ソチャ田吾左衛門ではないか、久しう逢はなんだ、いつも壯
健で結構々々

田「これは歌野の旦那様、御散歩で入らツしやいますか

とこれより兩人いろくの挨拶やら世間話ありて、田吾左衛門空右
衛門二人上手へ入る、アト出の鳴物にて、草餅賣賤の女好の份デメチにて
出で来る、紳士を見て草餅と卵子を賣付けてゐる、所へ警官何某巡

回の心持にて出で來り、草餅賣を捕へ

警「本官は職權を以つて此詩集村に於いて此鶏卵の發賣禁止を命ず

と云う、紳士怪しんで其理由を尋ねると、警官ぬからず、籠の中の鶏卵を取上げて

警「貴方よう考へて見給へ、風俗鶏卵だ

幕

○大切なまあらたな新玉歌壇かたんのにきわい繁榮(歌玉神社場)

本舞臺一面の平舞臺、歌玉神社朱の玉垣の書割上手に鳥居を見せ、下手葎葎茶屋にて見切、赤毛布を敷きたる床几二脚を正面に据ゑ、

此所總べて歌玉神社境内の場、賑かなる鳴物にて幕明く

書生甲乙二人正面に扣ねながら

甲「ヤア今日は、新年以來の好天氣、分けて七草の事なれば、市中の賑はまた格別、あまり家に燻ぶるのが、辛氣臭さに、棚の達磨も這出さずにはゐられないから、丁度君の來訪を幸ひ、飄然として一瓢を携へ、歌玉神社へ散歩に來たが、いつ見ても此社内は繁昌だの

乙「さうとも、當今の世にあつて、苟も歌玉神社の威徳を知らぬは、人にして人に非ずと云う次第だ

甲「成程、ソウ云へば此頃世間では、何んでも此社へ願をかける

と、人丸赤人ソコ除けといふ名歌が咏めると云う事で、猫も杓子も参詣すると云うではないか

乙「僕も今日雪中竹を一つ案じてゐるが、未だに名趣巧も浮かばない

乙「ソリヤそうと、大分遅くなつた、ドリヤお出かけとしやうじやないか

甲「いかにも、姉さんまたくるよ

女「難有うござい升

二人上手に入る

女「今日は大分お客様があるであろう、今の内一寸お参詣まゐりをして

來ませう、ソウシヤトこれも上手へ入る

出の鳴物になりて

歌葉蒔成、遊獵の服装、犬を連れて出で來り「我れ多年、和歌は好める道として、研究に研究を重ねと雖ども、未だ和歌の一首も得咏まず、偶々失戀の鬱を散せん爲め、遊獵に托して終日徘徊なせども、マダ呼子鳥一羽の獲物もなく、又歌の獲物もなし、ハテ詰らぬ事シヤナアコレにて花道より舞臺にかゝる

紳「幸、いつものお豚の所で、休息してまゐろう、コレお豚は居らぬか、又厄介になるぞ、コリヤ留守と見える

此時上手より新聞賣子鈴を振りて出て來る

新「號外々々、ホーラ今日の號外、歌壇新聞の號外、ベストの號外

紳「コレ新聞屋

新「へい、ヤア旦那は歌葉様ではムりませぬか

紳「ウンいかにも身共は歌葉帯成じや、ソシて其方は、イツモの新聞屋だの、勉強肝心々々、シテ何か珍聞はないか

新「ハイ、無い所ではございません、此號外を御覽じませ

紳「何々、歌壇新聞號外、

●戀愛ベストの流行 此程より京阪地方はベスト流行地として、其筋にも専ら撲滅に力を盡す所ありしが、近來戀

愛ベストと稱する一種の腦ベストを生じ、已に昨日〇、〇〇二女は新患者として届出たり、尙府下へも傳播の恐れありとて、目下文壇省風紀局にては、其撲滅策に汲々たりと云ふ

紳「コリヤゆゑしき大事、一日も早く世人に知らするか宜かるう、其號外残らず購ひつかはす程に、看客諸君に配付してよろう

新「難有うございます

コレにて號外を見物に配る

紳「オ、大儀々々いづれ後刻いろく仕留めて、馳走致すぞ

新「毎度ありがたうござり升・

とこれにて新聞賣子下手に入る、茶見世女上手より出で来る

紳「オホお豚か、いつもあてやか〜

女「毎度ごひみきに與かりまして、マダ御年始にもさんじませ

ぬ、ごめん下さりませ

紳「イヤ御不沙汰は、お互ひ〜

此時下手より女學生お轉婆ハ子好みの服装にて出で來り上手へ行

く

女「お嬢様又御參詣でございますか

女學生一寸會釋して上手に入る、跡に紳士見惚れる形

女「コレ旦那様

と肩を叩く、紳士吃驚して

紳「イヤ何、此景色が餘りよいので、一首考へてみた所だ

女「ソレにしても大分お袖が濡れました

紳「ウム、こりや涎か、コレは大方丑(牛)歳の(拍子木)チョンせ

いでがなあろう

(完)

九月廿八日暴風雨後、接久良伎之書

乃答作俳諧歌

品川 臣 沙 魚 磨

君がりを まかりし夜半の あくる夜は 癒にてありしを
 昨日また 風邪やひきつる 頭疾み 身内ほどれば
 打臥して 枕になづみ 懊惱オホイしく 過オホす此朝
 おもほえず 科戸シヤトの神の 雄進オホサびに すすび給へば
 雨まじり 嵐ふきまき 風まじり あめ打そゝぎ
 東の間も 止まらずしあれば 吾宿の 庭の大柳オホヤキ
 根もゆらに 動き出ぬと 家人の 罵るまにま
 病み人も 寝ては居られず 刎ね起きて 禪ハカマを固め
 軒の端の 梯ハシ押立てゝ するくくと 梢ハカマにのぼり
 細引を 幹クサに取結ユひ 其綱を 根本ハカマにひかへ

辛くして 事爲し終へつ 先づよしと いこへる時に
 御手紙の 折よく着きぬ 忙がしく 披きて見れば
 衣手の 内田氏に 長歌を 早も送れど
 のたまはず 御さとし言よ 痴チましく おちなき我を
 引き出でゝ 世にもいださん 御心の 辱けなさを
 恒よりも 嬉モしみ思へば 畏きや 仰せをまたず
 とく詠みて 送らんものを 此度は 得も詠みあはじ
 とは云へど 成も成らずと 加にかくに 作ナし試みて
 成りもせば 日暮ぬ程に 必よ 送り申さん
 いでや此 示し給へる 内日刺 宮崎大人の

漢詩は	いともめでたし	燃断吟髯 <small>クチヒゲチヒチリダチツ</small>	悲鳴口吻 <small>カナキゴエロメキクルシミ</small>
やゝくくに	吐きも出せる	生中の	ゑせ詩人の <small>ツタヒト</small>
思ひても	及ばぬ業ヲ	千萬の	書讀み徹り <small>フミトホ</small>
昔今の	事を知らずば	いかでさは	かくはなし得ん
歌よみの	身にふさはねど	漢詩の	賛辭をも <small>タ、ヘイト</small>
聊は	書きしるしつゝ	葵草	日影に向ふ
真心も	述べましものを	しばしとて	止めは置きぬ
思ふこと	多にはなれど <small>サハ</small>	栲繩の	長崎路ゆる
強飯を <small>コラメシ</small>	送り來ぬてふ	諺の	それも拙なし
かにかくに	いづれ近日	草々頓首	

○九月廿九日讀古槐之書論歌
學而論之俳諧歌

諸 持

足曳の	山鳥の尾の	しだり尾の	長き長歌
卷紙の	繰りてかへして	よみゆけば	をかしくなりて
火吹竹	噴き出す我れを	怪みて	妹もいふかり
垂乳根の	母も見ませば	我ながら	いよゝ咲喜 <small>エ、ラキ</small> て
猿股を	ゆひてかためて	腹の臍	宿替せむと
八百蓼の	辛く見終へぬ	そこ故に	疾めるかしらも
輕燒の	かろくしなりて	胸ひらけ	心なごみぬ

さばれ世に	のさばり出づる	えせ歌の	歌鬼どもは
田舎威す	駄法螺をふき	鞍馬山	鼻高人の
鼻高に	思ひあがりて	うつし世の	明盲らゝを
打つどへ	誇らひをれど	中々に	尻めど狭ばく
其つむじ	横に曲れり	護膜球の	うてば刎ねたち
帆立貝	おだてる時は	つけあがり	手におへぬものぞ
其よめる	えせ歌はも	心張の	棒にかゝらず
菜箸の	箸にかゝらず	おのがじゝ	御詫並べて
手前味噌	つけてよがれば	肥杓抄	手は觸れがたし
あはれ世に	真砂の中の	真玉なす	真の歌は

〇〇の	拓きたる	杖なくも	おそりさへ
〇〇の里の	歌の直道ぞ	安くし行かむ	ゆめあらむとぞ
〇〇の	すぐくくに	横さまの	吾はしか思ふ
大人の命が	歩みて行かば	沼に踏入る	

デス、である、かうだにそうだ、が、しかし、す
るとにソコで言文の助辭

丑年の初夢 (落語)

へい差代りまして、別に代り榮も仕りません、一席新年の御座興に、お笑草を辯じまして御免を蒙り升、何事もお話はタクランでは、いけませぬ物で、毎度連中が伺升通り、凝ッては思案に能はずの譬、今年は丑年だから、一ツ牛盡しの美文でも作つて見やうとか、牛の新体詩でも晚翠調でやらかそう杯と、ヒネリ出しまして、却ッてお笑ひになりません様な始末で、手前共も一つ『滑稽牛地理學』を編輯致しまして、牛鳴山は和泉にあり、高さ何百何十尺、何々郡の中央に屹立しとか、又は牛ヶ淵は九段坂の東にあり、深潭常に藍色を

湛へ、時に身投げありてはエンギでもございませぬ、然らば一ツ方面を代へまして『滑稽牛人名辭書』でも編纂致して見やうかとも存じましたが、ソレも中々材料の入ります仕事で、トテモ手前共のお齒に合ひませぬ『萬葉集』の作者で、大伴宿禰牛養、同じく上毛野の牛甘、建部牛麿、有度部牛麿など、古代の詩人の名前を申上げたり、又は牛若丸、これ丈は坊ツちゃん方の疾くに御案内ていられますが、同じく鎌倉時代に牛尿など、云う苗字も見えて居り升、次いて一鞭後君休怪、君駕大龍吾鍔牛と詩で洒落を云ツた鍔牛和尚などのとを申し上げた所でお話が只お堅く斗り相成りまして、何となく今朝のお雑煮のお歌賞が、マダ消化れずに、胃の腑に停滞致してあるや

うな鹽梅式などは、餘りドット仕りません、ソコでタツイもない、
 淺薄な坊ちゃん方へのお笑話を申し上げまして、早速引きがります故、暫時の間お耳を拜借を願ひ升、サテ
 例の八ッさんに、熊さんでござい升、此お二人は狂言の太郎冠者と
 同じく、手前共のお友達でござい升が、此れ二人が、ドウか今年は
 丑の年だから、何とか、一つ、牛盡しの趣向で、回禮かたぐい面黒
 く遊ばうではないかと云ふので、大晦日の晩から寄合つて、一盃機
 嫌で相談を始めました、マダ夜が明けぬえのかしら、今年は是非牛
 のモウ／＼で夜が明けてほしい、例のオケッコイヤオキチャツチエ
 ーのチャボの鳴聲で慕明は感心しぬはナ、鴉のカー／＼も今年から

發聲禁止を行たいたものだ杯、云ツてをりまする内に、夜はほがら／＼
 と明けました、丁度お隣が牛乳屋さんであつたもの故モ／＼、メ
 イ／＼(これは舶來の牛の鳴聲でござい升)べたぞ、ホーら見る、
 ちやんとね逃へ向きに出來てゐらア、此分では早速趣向に取かゝろ
 うと云ふので、先づ時節柄少々危険ではあるけれど、牛の乳を二合づ
 い呑みまして、乳腹で朝からテク／＼では、ございません、牛の歩
 みに習らツてノソ／＼と出かけました、行先がドコかと申ますと、
 まづ牛島から牛の御前へ參詣して淺草の牛屋で一盃キヨシめして、
 マサカ千束町の屠牛場一覽と云ふ譯にも行きませんから、公園をぶ
 らついで、道草を喰ひながら知り合の家へ廻禮致しまして、其日は

別に何事もござりませんで、二人連れだつて宅へ返つてまゐりました、ヤレ／＼草臥れた、コレは早速牛のやうに寝るに限るのだと、床をのべてやすみました、スルトね隣で歌がるたが始まつたと見え、**「うしと見し夜うまは戀しき」**杯と中々御陽氣でござい升から、二人とも寝附かれませんが、ソコで「オイ熊公トテも静かになるめねから、狂歌でもやらかそう」ソレがよかろう「コウ憚んながら聞いて呉んねね、一首浮かんだぜ、何と云ふのだ

千早振る神戸の牛の肥牛の

ロースの肉の味の上さく

どうだ、牛飼先生の添削でも願がつて見てえくれいなもんだ「馬鹿

に御詫をつくな、おれもやるぞ、神戸の牛肉より、モツと上等舶來をやらかすから、コウツと

アルハベのいろは牛肉屋の高樓に

鍋叩く子の腹満てるかも

何んだい、アルハベたア「コリア手前達ア知るめえ、いろはと云ふ洋語だ、ウムそうか大分ハイカラをやるな、ソコでおれも一首やるぞ

ぬば玉の黒足袋うがつ牛屋女の

聲黄いろくて日は暮れんとす

「どうだく」牛屋女は新らしいな、所でおれも

三番は牛ウシで御酒臺、六番は

しんこおかはり、九番のおたち

「愈よ出て、愈よ下等か、ソレよりオレの義太夫をきいて呉れ」又十
八番かオイてくれお立ちに願ひたいものだ、ソウ云ふもんじやア
ねえ、朋達甲斐のねえ男だ

鶯口瘡ウツとてお姿をホイ、書にはかゝせは、せぬものを、ヤ

「ヨセ〜とんだお茶番だ、とこれから眠につきました、扱二日にな
りますると、初荷の太鼓で賑かでございます升、今日は一つ山の手の方
を廻らうと云ふので、九段の牛ヶ淵ウシガヅナからして、牛込ウシノにかゝりまして、
小石川の牛天神ウシノカミに參詣致しました、どうか今年は十分に福をお授け

下さいましと、誰れも慾の無いものはございせんから、一生懸命
に信心を致しまして、歸宅致しました、今晚は是非一つ、おめでた
い初夢を見なければなるまい、先刻アレ程天神様に願を掛けておい
たから、定めし天神様が夢枕に立つて、善哉々々汝とか何とか仰せ
らるゝに相違ないと思んで二人とも夢に入りますと丁度時刻も丑三
つ時、果して大きなアメ牛アメウシに乗られましたして神様が夢枕に立たせられ
ました、二人のものは、ソラお出でなすつたと、再拜頓首恐惶仕ッ
て、どうぞ天神様お福をお授け下さいましと、柏手をウツて頻りと
禮拜して居ります、貴様達勿驚と神のドス御聲に能く仰向いて見
ますると、天神様と思ひの外天狗様だ、コリヤアうしぎだウシギと、よく

く見ますると晝間途中で逢つた岩谷の天狗烟草の初荷ですから、
なんだ人を馬鹿にした夢を見たものだと、思はず笑ったので目を覺
まして、二人とも烟に巻かれて居りました、これでお終まひ

○

緋縮緬のたすき鉢巻、町の子等樽天王をたゞに擔
き行く

○

つひにだに泣かぬ男の辨慶もかなしかりけん關
の松風

鶴と詩人(輕口)

今年は芝居で『芳哉義士譽』まッた『源三位頼政』杯と云ふ、新作狂言
が出来たのは、藝苑の爲めに喜ぶべきことだと一人が云へば、ソウ
サ何んでも新作に限るて、そこで其頼政で思ひ付いたが、何とか云
ふ詩人は、朝鮮へ出掛けて虎の聲を聞いたとやらで、頻りに虎通を
ふりまはして虎の歌を詠んだ、そこで虎の○○と云う綽名が付いて
名が高くなッたそうだと一人が云ふ、「うんそうだ」所が其虎の聲と
思ッたやつが實際虎の聲ではないそうだ、威鏡道へ行く者は必ず一
度は聞く聲で、多分は海などの反響ではあるまいかと云ふが、是を

朝鮮人は蛇の聲と信じてゐる、シテ見ると虎の〇〇と云ふ綽名が蛇の〇〇と改稱せねばならぬ「成程シテ御當人が女好で狒々であるから猿の〇〇か「ソコで猿虎蛇の〇〇となる「道理で其咏む歌が鶴だストトンくくくく

○ かざしつる灯ともしにさえて村雨の大刀の刃さむく水煙ふるなり

○ レオニヅ、見てを歸へれば湯島台雲ひやしかに

夜は明けんとす

○ 布袋なす亨が腹にあなうがち腸ロダひきいだして狐キツにはめなん

○ 雨敬が禿げし頭に釘うちて蠟燭ロウソクともしふみ讀まばいかに

○ 侯爵の伊藤の眼尻つり上げて又來ん春の目かづらにせん

公卿華族大名華族新華族生れ拙なきすぐせなり
けん

○
青蛙殿様蛙雨かへるまことのみちにかへるすく
なき

○
髻と云へば先畏こみて詔ひて日もまた足らぬ司
人かも

三 題 噺 (白百合、迦具土、木村——某君出題)

へエ、白百合、迦具土、木村と云ふお三題を頂戴致してござい升、
どうも困まりましたな、別けて木村といふ方は私にも別懸な方が一
人ござい升、ソコでコレは單に木村といふ御苗字に附いての駄洒落
でお茶を濁しますやうな寸法で、おさし合がございましたら御免を
蒙り升

諸今日文學雜誌大流行の有様で、先日久保君の『新文藝』に續いて湖
山君の『活文壇』なども廢刊といふ場合に立至られたそうでござい升
が、マダ一方では『新聲』『文庫』『明星』『新文』を始めとして、いろ

くゝな文學雜誌が出版せられて居り升、丁度此頃の事で天國でも雜誌出版といふとが一の流行に爲つて居り升、第一に『太陽』『片はれ月』は申すに及ばず、天國も矢張星バカリと見えまして、雜誌屋の店頭はヤレ木星だ火星だ土星だ天王星だ、海王星だ杯と星ツクメになつて居り升、ソレから『長虹』だの『白虹』『彩虹』だのと、虹の展覽會の様に虹の神々様も出版を争うと云ふ次第、所て女神達の方でも負けてはならんと云ふので、天津少女女史の如きは『白百合』と云ふ雜誌を發行されました、表紙はアールヌブナーで羽衣をあらはしきして中の挿畫がいろいろ裸體畫で、別に警察署もないと見えまして腰卷の災難もなく、雜誌はドシ／＼賣れ升、三版四版と云ふ景氣で

其歌ッてゐるのは主に七夕の戀愛詩などですから、コレが讀者には夜這星など、云ふ連中が多くあるのでござい升、コノ景氣を見てチレも一つヤツて見やうと出かけて來たのは雷様です、題號も雷鳴でもあるまいと云ふので乙にヒチツて『迦具土』と題して詩文雜誌を出版しました、コレはまた一向に賣れない、大に持て餘してゐる所へヤツて來たのは、木村君です「ドウダ雷鳴君雜誌は賣れないかね」「イヤどうも面がコワイと見えて賣れない、ソウだろう、當今は何でも女流行で、女ならでは夜も日も明けぬと云ふ有様だから、君のお手際ではトテモ行かないよ、時に君に少し拜借ものが有つて來たのだが、借して呉れるか」「何んだ借してくれツたッておれの身に付い

てあるものは、虎の皮の褌だが、マサカにコレを借りて文士相撲をやるのでもあるまい、ソレとも鑢カチザイ棒か、コレも不用らしいが全躰何が欲しいのだ「僕の借りたいといふのは、褌でも鑢の棒でもない只、君の太鼓がほしいのだ、此太鼓を何にする「イヤ僕も雑誌では手古摺ツたから、一ツ商買替へをして實業にありつかうと云ふのだ「シテどんな實業「ソノ太鼓を叩いて木村のパン、亞米利加のパン

握り飯と代へて植ゑけん葦蟹の庭の柿の實あからみにけり
夏瘦によしといふ鱧とりて食はん今日か土用の丑の日なるらし

* * * * *

○詠焼栗、寄口網諸持

十口 木 鬼

内君の	賜 <small>たま</small> ひし焼栗	洋服の	ポケットにあるを
九段阪	降る阪道	取出し	食 <small>は</small> まんどせしが
望月の	三ツある數を	一ツ喰ひ	缺けまく惜しみ
龜の首	出しては隠し	指ざわり	障りよろこび
かくしつゝ	歩 <small>かち</small> 行よりゆくに	厨 <small>くりや</small> づく	俎橋 <small>くろはし</small> の
橋詰の	人待つ車	歸路を	召させ給はね
オハシタで	如何さまです	とばかりを	こちたくいふに
外山なす	高くはあらず	いざやとて	吾が打乗れば

道よきは	からゝに進み	ぬかるみは	ことめき泥む <small>ナマ</small>
眼鏡より	馬車 <small>ウマクルマ</small> のりかへ	さや／＼の	鈴 <small>スズ</small> のひしき
馬進み	車動 <small>クルマウツ</small> かひ	ある程の	久 <small>キウ</small> さるもあらで
新橋ゆ	九時二十五分	其汽車は	非常に後れ
品川に	十時に着きぬ	其あひだ	かの焼栗を
よろ事に	トント忘れつ	宿につき	脱ぐ洋服を
打のばし	とかく物する	下女の手に	何かは知らず
丸き物	こゝにと云ふに	ソレよソレ	ろれこそあれと
奪 <small>ト</small> ふ如	取る手も早く	三ツながら	一所 <small>イコ</small> に含み
猿喰 <small>サルク</small> ひに	頼 <small>タノ</small> うごめかす	其顔を	をかしき顔と

下女 <small>シメ</small> はしも	腹ぞ抱ゆる	吾はしも	舌こそ鳴らせ
繁 <small>シノ</small> 鉏 <small>クシロ</small>	甘 <small>アマ</small> き栗 <small>栗</small> かも	此栗は	神 <small>カミ</small> の木の實か
其うちに	又も參らば	焼きてたばさね	

○同答古槐俳諧歌

麻裳 <small>マカサ</small> よし	きずの夕べ	品川に	歸 <small>カエ</small> らふ君が
道 <small>ミチ</small> すがら	食 <small>ク</small> はん料 <small>シヨ</small> に	吾 <small>オレ</small> 妹子 <small>メコ</small> が	焼 <small>ヤキ</small> きし焼栗
味 <small>アジ</small> よしと	たゝふるまにま	下 <small>マカダチ</small> 婢 <small>ヒ</small> を	八百屋 <small>ヤチヤ</small> に馳 <small>ハ</small> させ
圓 <small>ツブ</small> ら栗	さはに購 <small>カウ</small> ひ	皮 <small>カ</small> 剝 <small>ヒ</small> ぎて	火鉢 <small>ヒバチ</small> に埋 <small>ウ</small> め
文讀 <small>ブンドク</small> みて	耽 <small>タ</small> けらう時に	凄 <small>シバシバ</small> じき	響 <small>ヒビ</small> の共 <small>トモ</small>

焼灰の	四方にとばしり	我がねたる	枕のあたり
文机 <small>フジエ</small> の	硯の海も	拷綱 <small>タツツ</small> の	白くしなりて
小指さへ	焼かぬにけり	いにしへゆ	ね伽噺に
語りつぎ	いひつがひける	猿蟹の	仇討語り
これをしも	今の現 <small>マツ</small> に	見るがごと	はぢけ給へる
いが栗の	栗の命 <small>ミコト</small> の	かしこきそ鴨	

反歌

こり摺を疊にい撒き、羽根箒早も持てこせ灰清むべ

仙人をたすけ起して驚ける賤の女の上に雲去らで
あり(咏雲)

市中をすぎ行く按摩杖たてゝ耳かたぶけぬやまほ
とゞぎす

羽子つきにつき負かされて益荒男の頬髯のあたり
墨こいた塗らる

鼻の上につきたる煤をぬぐひあへず疊叩きありく
髯あるじかも

人皆の足も廻らず、手もたらぬ、年の大晦日我ひとり
ぬる

餅搗かず門松立てず、餓に泣く、餓鬼叱りをる裏町長
屋
紅き白き大きな餅ひ籠に入れて、菓子屋のはひり
人出入する
小風呂敷手に提げもちてシヨールかけ、小走りに行
く歳の市路を

珍派
詩文
へなづち集終

明治卅四年十二月十一日印刷

明治卅四年十二月十三日發行

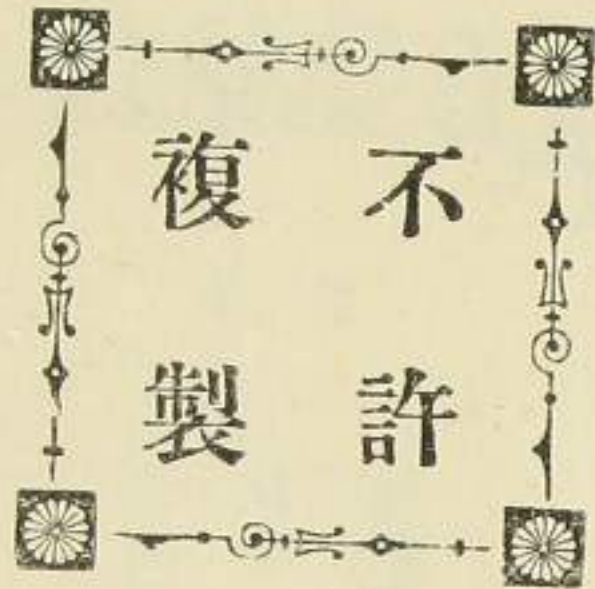
定價拾五錢

著作者 阪井 辨

發行者 佐藤 儀助

印刷者 白土 幸力

印刷所 三光 堂



不許
複製

發行所

東京神田錦町二丁目
電話本局二八五三番

新聲社

東京神田美土代町二丁目一番地



次 目

文壇樂屋觀
文壇風聞記

妖堂編
居士著

定價十五錢
郵稅二錢

同 前

福地櫻痴、三宅雪嶺、島田三郎、岩本善治、江見水蔭、
竹越 又、內村鑑三、幸田露伴、田口鼎軒、國府犀東、
高山樗牛、田岡嶺雲、大町桂月、松村介石、山路愛山、

明治文學家評論

新聲社
同人著

(新刊)

定價三十錢
郵稅金四錢



蒲原有明君歌 生田葵山君著

社會自

殺

定價廿五錢
郵稅四錢

田口掬汀君著

戀愛片男波

定價二十錢
郵稅四錢

田山花袋君著 (第三版)

野の花

定價三十錢
郵稅四錢

風葉 蘆花 柳浪 魯庵 眉山 十家作
水陸 春葉 春雨 葵山 掬汀

まこも集

定價三十錢
郵稅四錢

小説書類



正岡藝陽君著 (增訂第四版)

時代思想の權化 星亨

定價廿五錢
郵稅四錢

高須梅溪君著

青年觀

定價二十錢
郵稅四錢

新聲社同人著 (第四版)

三十棒

定價二十錢
郵稅四錢

正岡藝陽君著 (最新刊)

鳴呼賣淫國

全一册 定價廿五錢
郵稅四錢

評論書類

最新刊

桂花集

百金を懸けて天下に募集したる小説、美文、論文、及詩、歌、俳等を集め、外に新聲社同人苦心の作を掲ぐ。眞に明治文壇の偉觀たり。
創作四面……一條成美畫

定價 廿五錢
郵稅 四錢

月桂冠

定價 共金拾
郵稅 錢



高須梅溪著

暮雲

定價 十二錢
郵稅 四錢
目次

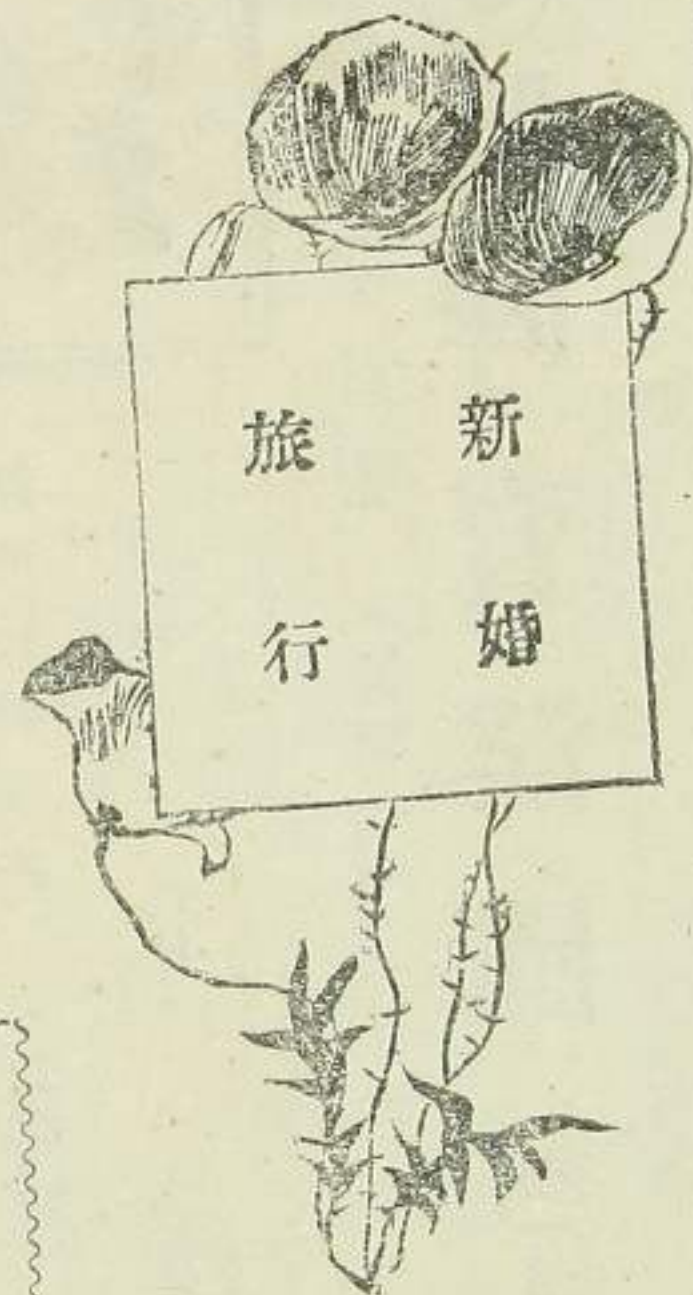
著者の美文は文壇の絕品也。其想の清新にして、其辞の秀雋ある、天下何人かよく、匹敵し得るものぞ。

第三版白

露集

文學士 淺野馮虛
文學士 久保天隨
文學士 戶澤姑射
文學士 中村不折
下村爲山 畫

定價 卅錢
郵稅 四錢



新婚旅行

德田秋聲 生田葵山
田口掬汀 西村渚山 著
定價 參十五錢
郵稅 四錢
結城素明 平福百穂
一條成美 西村渚山 畫

ふる郷

第六版
田山花袋著
定價 廿五錢
郵稅 四錢

學生叢書

農學士柳內蝦洲君著

『每日』主筆 島田三郎君序文

第一 二十世紀の學生

刊既

農學士 志賀重昂君序文

第二 東都と學生

刊既

青山學院長 本田庸一君序文

第三 學生と生活

刊既

第三十一月發行

第四 理想的學生

全六部 每冊八十錢 郵稅四錢 宛行發回一月每部一

評釋書類

文學士 登張竹風君序
講師 山川芳則君著

美 文 評 釋 (新刊)

定價廿五錢
郵稅四錢

- | | | | | | |
|---------|--------|------|-------|------|---|
| ● 俳句評釋 | 河東碧梧桐著 | (六版) | 定價十九錢 | 郵稅二錢 | 前 |
| ● 續俳句評釋 | 河東碧梧桐著 | (四版) | 同 | 同 | 前 |
| ● 英文評釋 | 淺野文學士著 | (二版) | 定價二十錢 | 郵稅四錢 | 前 |
| ● 俳文評釋 | 阪本文學士著 | (二版) | 同 | 同 | 前 |
| ● 國文評釋 | 內海文學士著 | (二版) | 同 | 同 | 前 |
| ● 漢文評釋 | 久保文學士著 | (二版) | 同 | 同 | 前 |
| ● 古詩評釋 | 久保文學士著 | | 同 | 同 | 前 |



新婦の使命
第一卷

小金井喜美子女史序
文學士寺内子誠君著

定價廿五錢
郵稅四錢

口繪 一條成美君畫
肖像 鳩山春子夫人

川上眉山君著

多恨の遊子、身は獨り、一壺の酒を友に湘南に遊ぶこと旬日、滿囊の詩想を披いて此著あり。景情双絶、詞彩煥發、一卷是れ無韻の詩、とりて水晶盤裡盛るも可也。牀裁美を極め麗を盡くして、我社が明治文壇有數の傑作を遇するの微衷を現す。

ふところ日記

空前の本 全一冊 定價廿六錢 郵稅四錢

無名氏著 墳墓

(定價廿錢郵稅四錢)
本書は人生の安息所とも云ふ可き墳墓を描きたるもの、文字流麗、金聲にして玉振、まさに朗々高く歌ふに足る可し。
▲第三版出來す▼

(料資文修)

- ◎ 露伴水陸 落合鳴雪 眉山柳浪 鏡花風葉 天隨 十家談
- ◎ 大日本文章學會編纂(總クロス金文字入) 文章形容辭典
- ◎ 德富蘇峰君序 阪井松梁君著 能文要訣

定價二十錢 郵稅金四錢
定價三十錢 郵稅金四錢
定價十八錢 郵稅金四錢

正岡藝陽君著 (第二版)

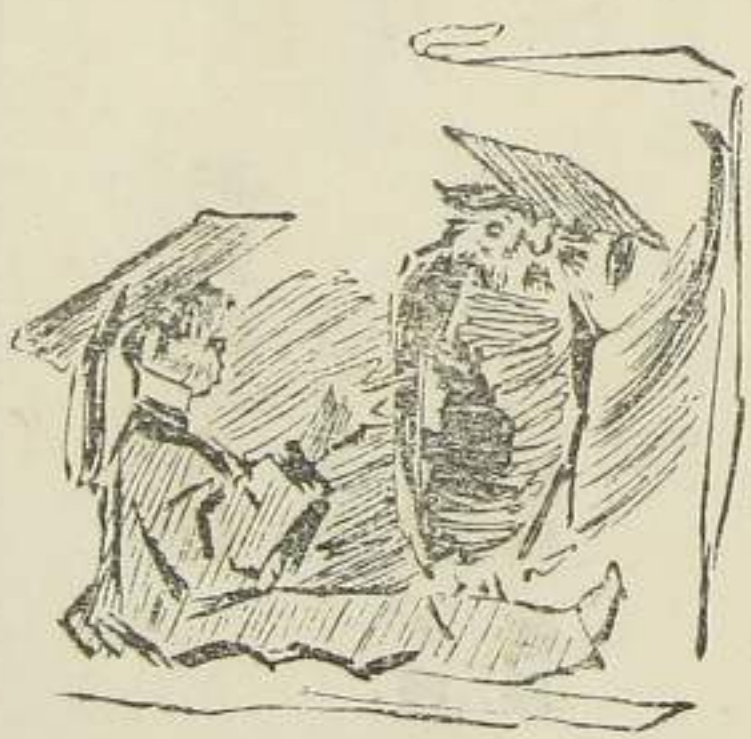
新聞社の裏面

定價十八錢 郵稅金二錢

新歸朝子君著 (一名、ハイカラー亡國論)

滑稽なる日本

定價十八錢 郵稅金四錢



青年文學叢書

全 部 六 冊 完 成

江 藤 桂 華 君 著

- 一第 文學攻究法
- 二第 美文作法
- 三第 美學大要
- 四第 論文作法
- 五第 韻文作法
- 六第 青年と文學

各編增
版出來

一部十錢郵稅二錢
六部郵稅共卒四錢

秋 風 琴

卯 花 衣

定價十八錢 郵稅二錢
定價十五錢 郵稅一錢

小島烏水著 (四版)

扇 頭 小 景

定價二十錢 郵稅四錢

金子薰園著 (三版)

片 わ れ 月

定價廿五錢 郵稅四錢

婦人の側面

正岡藝陽君著

訂正第六版

成美畫 定價二十錢
郵稅 四錢

戀愛と文學

大町桂月序 小林柳村著

一條成美畫 山中古洞畫

定價二十錢
郵稅金四錢 (版五)



文學士
著君月桂町大
觀小學文
(版三第)
錢四稅郵錢十三價定

文學士 久保天隨君著
◎東西文豪評傳 (第一) 定價二十五錢 郵稅金四錢

觀察奇警、論斷妥當、而文字雄健奔放、子
專門の常識を傾倒して、濃艶俳治の四六
文を一掃して八代の衰を起せる文界千古の巨人の
全き面目を知らんば、まさに本書を一閱せよ

文學士 久保天隨君著 (第二版)
◎山水美論 定價二十五錢 郵稅金四錢

紀行文家として、文壇に獨歩する天隨君の、風景
論にして、山を論じ、海を説き、雲を叙し、或は旅
行を奨励し、或は風懷の高士を説く、眼、巧みに
美の根柢を視て、豪健瑰麗の筆よく之をあらはす。

著君夢醉村西
史情本日
錢四稅郵錢十三價
史愛戀の會社我るれ亘に年千三
也多饒てめ極趣興



緒方流水水君著 (第二版)
◎塵影錄 全一册 定價三十錢 郵稅四錢

流水君の論議最も大膽、思む所なく憚る所なく、
恨を天下に買ふを辞せず。觀察極めて奇警、常に
他に一步を先づいて縦横の抱懷を吐く。一卷の『塵影
錄』これ明治文學の側面觀なる也。

無名氏著
◎自然美觀 全一册 定價十八錢 郵稅二錢

著者は筆の奇矯と識の博該を以て名を當代の文壇
に馳する者、自然に吟嘯する茲に幾年、詩の眼光
に映して種々觀察を恣にし、此を『自然美觀』と題
して梓に上す、自然を樂む者の好伴侶也。

類書切品

青年新軀詩集	俳諧音調論	青年文集	文章講義大成	木蘭舟	第二嶺雲搖曳	嶺雲搖曳	漢詩評釋
雅正軒詩話	國文讀本辭解	翠嶺白雲	二葉集	青年文叢	紅葉舟	春風秋聲	二葉集